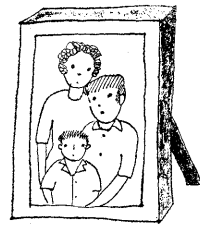


随 想

『幼児教育の基礎理論』を翻訳して思うこと



森 上 史 朗

最近、アメリカのコーエンとルドルフの手になる「幼稚園と小学校移行期の教育」(Kindergarten and Early Schooling)を翻訳し、『幼児教育の基礎理論』(全二巻、教育出版)という表題で出版しました。この本の翻訳にあたっての苦心談、エピソード、感じたことなどを本誌に書くようにとの求めに応じて、二、三の感想を述べてみようと思います。

一、保育における「日本」と「外国」

これまで、さまざまな外国の幼児教育の本にふれてきて、参考になる点多々ありましたが、しかし、わが国の保育への適用を考えたとき、多くの場合かなりの限界を感じざるを得ませんでした。つまり、その国の保育にはその根底にそれぞれの国の歴史や流れや、国民性・社会的背景・政治的な事情などの独特の事情があり、そういった土壌の相違を十分に理解しないで、“切り花”のようにわが国に移し入れるには無理があるからです。とくに、日本の

幼児教育学者には、それらが日本の現実にとどのよう  
に役立ち、その適用に当たってどのような問題があ  
るかをわきまませず、「アメリカでは……」、「ヨ  
ーロッパでは……」ということばかりを追いかける  
先どり紹介学者、いわゆる「ではの守<sup>かま</sup>」が多いとい  
われており、そうした意味で、私も外国の本を日本  
に紹介するには、慎重でなくてはならないと常日ご  
ろ思っていました。この考え方は今でも変わりませ  
ん。しかし、多くの本の中には、そうしたお国がら  
の違いをあまり感じさせず、今のわが国の保育の当  
面している課題に示唆を与えてくれるようなものも  
あることも事実です。

たとえば、この本などもその一つで、著者たちに  
よると、アメリカでは、一九六〇年代に入ると、小  
学校に入ってからの「落ちこぼれ」が大きな問題と  
なり、その解決策として、幼児教育にスポットライ  
トが当てられ、小学校で教えるような狭い意味での  
学習を重視しない幼稚園は「古くさい」というレッ

テルを貼られるようになったということです。そし  
て、文字や数の学習は知的発達を促すという根拠の  
ない安易な考え方も出現し、現在でも幼児の眞の学  
習とは何かということを知らない親やマスコミ、教  
育委員会の役人などに強く浸透しているということ  
です。そして多くの企業が認識能力を発達させる教  
材の開発に競って投資するようになり、「新しい」  
ということを強調したトレーニング用の教材が数多  
く出現するようになりました。

幼稚園の教師は、そうしたことが子どもの眞の発  
達には意味のないことを直観的には知っていたので  
すが、それをきちんと説明できなかったもので、あら  
ゆる方面から攻撃され、幼稚園でワークブックを  
与え、小学校で逆に子どもの体験を重視した学習を行  
うという珍現象が生じてきたというのです。

こうした攻撃をはね返すためには、コーエンら  
は、これらの保育者は、「読み・書き・数量形」な  
どの能力を形成する「基礎とは何か」をしつかりと

説明できる力を養わなくてはならないことを強調しています。

こうした記述に本書のいたるところで出会い、これは今現在の日本の幼児教育の当面している問題について書いているのではないかと錯覚するほどで、この本の中に自然にひきこまれてしまいました。

このように国を超えて共通する課題もあります。しかし、それを掘りさげていくと、現象的には同じように見えても、その底にそれぞれの国の独得の背景がある場合もしばしば存在しています。そうした点にまで深く目を注ぐことが、外国の保育を参観したり、わが国に紹介したりする上で欠かせないことのように思います。

## 二、保育における「新」と「旧」

しかし、この本の著者たちの考え方がアメリカで主流を占めているわけではなく、現状は、残念ながらわが国同様に「新しさ」を売りものにする考え方

を採用する幼児教育もかなり力をもっているようです。

もちろん、幼児教育の世界には旧来の慣習と伝統のみに依存した「脳軟化症的保育」、「マンネリ保育」も蔓延しています。それは打破していかなくてはならないのですが、それは単に新か旧を破るだけの新型保育を作り出すことではないと思います。

今の子どもたちは、宇宙・銀河系・原子などのむつかしいことばを使ったり、マイコンを操作したり、漢字を書いたりします。そうすると、私たち大人は何かすばらしい子どもが育ってきていると誤解しがちで保育もそういう方向に走りがちです。しかし、コーエンらは、そうしたことは、子どもの本質的な発達からみてきわめて表面的なことに過ぎないことを、本書の全体を通じて一貫して強調しているのです。そして、幼児教育の方法は、主に遊びを通して、子どもが現在の「今、この場」の世界に夢中になれるような最もよい方法、子どもたちが自分た

ちの生活を主体的に作り出し、こうとするように導く最もよい方法を見つけ出すことにあるとするのです。もちろん、現在の「今、この場」の世界は、過去の「今、この場」の世界とは違います。したがって、園における教材や経験や活動も過去のものと違ってきています。しかし、変化するものの底にあって「変わらない本質」に目を向けることの重要性を彼女らは強調しているのです。

こうした記述にふれると、「若い彼は当時の保育界の現状にあきたらなかつた。それは彼の研究の結果か、若さの勢かわからないが、とにかく、不満の点が理論にも実際にも多かつた。ただし、彼自身の考え方として、教育にそう新が得られるわけではない。千古永劫の真こそとうといのであることは知っていた。それで、世間に新しがり屋のように、何もことごとく新保育の名で高慢な顔をしようなどとは思ひもよらないことであつた。ただ一途に真保育を求めたのである……」という倉橋惣三の『子供讃歌』

のことは思い出さずにはいられないのです。

### 三、保育における「実践」と「理論」

最近、保育の場で実際に子どもとふれたことのない教育学者や心理学者が、「幼児教育は女の世界だから理論や体系がない」、「それに一つ筋を入れてやろう」とおせっかいをする傾向が増えてきました。園長会や保育の全国大会などで、そうした学者が歓迎されることを知って、私自身、そうした場へ出かけることが次第におっくうになってきているのが正直なところです。

しかし、理論の必要性を否定しているわけではありません。これまでわが国の保育現場では「講習会」は花ざかりで、講演会は閑古鳥が鳴く」といわれてきました。それは、ほとんどの保育者が右から左にすぐに役立つテクニクの修得以外には関心を示さないという傾向が強かったからです。一方、理論という実践とは無関係に理論的枠組みを精緻にする

このみをめざした抽象論が中心で、保育者がそっぽを向いてしまうようなものがほとんどでした。そのため、教員養成審議会などで、委員の中から「幼稚園は歌って踊って」というテクニクだけで、理論を必要としない仕事だから、プロフェッショナルな仕事ではない、などという暴論がとび出したりすることになるのだと思います。

そこでコーエンらは、今後、保育者の専門性を高めるためには、よい実践者になると同時に、「なぜそうするのか」、「その中で子どもたちがどう育っているのか」というしっかりした理論的な考え方にもとづいて実践が出来るようにならなくてはならないと主張しているのです。ただし、その理論というのは、実践と乖離した理論ではなく、実践から生まれ、実践を支え、実践を高める理論でなくてはならないのです。

子どものための真の保育を願う研究者と実践者が協力して、そうした「実践理論」というものを創り

出していかないと、保育の専門性の向上という大義名分のもとに、一見理論的な装いをもったまやかしい幼児教育が登場し、それがしろうとの管理職や園長、マスコミなどの共感をえて、保育現場に押しつけられるような傾向が増大していく危険があります。こうした事情はアメリカにおいても同じことのように、コーエンらは、そのように誤った幼児教育の氾濫を阻止する意味で、実践に根ざし、実践を支える理論を現場の保育者に伝えたいという願いでこの本をあらわしたと述べています。そのため、本書では、まず実践事例を示し、その実践を支え、深めるための理論をその実践の中から導き出そうとしています。その基本的な姿勢は、倉橋惣三が、先ず一切の理論的な枠組みを排し、子どもたちとのふれ合いの中、保育の実践の中から理論を組み立てていったやり方と非常に共通するところがあるように思われます。

ところで、この翻訳書のタイトルを『幼児教育の

基礎理論』とすることには、私自身にかなりのためらいがありました。なぜなら、現在のわが国では、理論、ということばは抽象論、一般論で、「実践に関係のないもの」という受けとめられ方がされるのではないかと危惧したからです。そのために、「実践理論」という表題も考えてみたのですが、編集者から一般になじみにくいものという反対で、「基礎理論」に落ちついたという経緯があります。しかし、出版してみると、現場の保育者から、むつかしい理論書と読んで恐る恐る読み始めたところ、ほとんどが実践に関係することはかりで、表題にそぐわないのではないかという実感をもったとの声が多く寄せられ、「実践と理論」ということばの受けとめについて、あらためて考えさせられているところです。

### おわりに

翻訳に際して、この本がどんなに共感できる部分が多くても、何しろ国情の違いとか、保育観の違い

も多々あることを予想し、その点に関しては、詳細な注釈をつけるつもりでした。しかし、訳し始めてみると、その必要がほとんどないほどに、その差異を感じさせるところの少ないのに驚かされました。

しかし、こまかいことになると、アメリカの幼稚園のほとんどが公立の小学校併設で、五歳児が中心であり、半日保育であることなどから、低年齢での実践事例が少いこと、わが国の保育園のように長時間の保育の中での子どもの生活や遊びをどう考えていったらよいかなどへの示唆が少ないことなど、多少の不足な点が残りました。

そうした問題をふまえながら、わが国の実践の中から、こうした実践と理論の統合をめざす研究が一日も早く生まれることを切望しています。本書の役割はその時に終ることになります。

(日本女子大学)